

この度は第3回日本筋学会奨励賞という栄えある賞をいただき、砂田理事長、選考委員の先生方に御礼申し上げますと共に、これまでお世話になった恩師の先生方、共同研究者の先生方に改めて感謝申し上げます。

超高齢社会である日本において、加齢に伴う筋量・筋力の低下（サルコペニア）は喫緊の医学的・経済的課題となっています。しかし認知症や骨粗鬆症といった他の加齢性疾患と比べて、サルコペニアの発症機序や分子病態は明らかになっていない点が非常に多く、基礎研究が必要な領域だと思っています。

2016~2019年までの間、私は（株）富士フィルムヘルスケアラボラトリーでサプリメントを用いた臨床試験に従事していました。サルコペニアの基礎研究が必要だと思ったのは企業にいた時で、大きな医学的・経済的なニーズがある反面、サルコペニアへの介入法を樹立するために必要不可欠な発症機序・分子病態の研究が立ち遅れていると感じていました。そこでNAD⁺/Sirtuinに着目した老化・寿命研究を行っていたワシントン大学の今井眞一郎先生に従事し、サルコペニアの研究を始めました。大学院生の頃から国立精神・神経医療研究センターの武田伸一先生のご指導の元、筋肥大・筋萎縮・筋再生と幅広く骨格筋のことを研究させていただき、東京大学医科学研究所の田中廣壽先生の前では他臓器関連の視点を学ばせていただけていました。アカデミア・企業で出会った多くの方々から、数多くのご厚意やご指導をいただき、サルコペニア研究を始めるための礎を築く機会をいただいたと思っております。

2022年からは国立長寿医療研究センターでプロジェクトリーダーのポジションをいただき、サルコペニアの研究を進めています。サルコペニアを本質的に理解するためには、骨格筋だけでなく、全身性あるいは個体レベルで起きている老化現象として捉える必要があるという思いもあり、中枢（脳）のNAD⁺代謝、骨格筋のNAD⁺代謝、そしてNAD⁺代謝に限らないサルコペニアの分子病態という3つのテーマを主軸とした研究を行っています。最終的には医・食の両面から、サルコペニアに対する介入法の開発に繋がるような研究ができればと思っています。

忙しい日々を追われると、つい”いつまで？”、”どうやって？”ばかりに目が向いてしまいがちですが、一番重要なのは”なぜ？”を考え続けることだと、恩師から言われたことがあります。研究にせよ、キャリアにせよ、色々なことに通じることだと思っています。まだ研究を始めたばかりの身ではありますが、私から”若手の人へのメッセージ”として、最後に綴らせていただきます。

